

小ネギ直まき栽培では低温期はべたがけ被覆で発芽促進

野菜・茶業研究所

冬期の在圃期間の短縮を図るため。播種から出芽までの日数を短縮できるべたがけ資材、被覆方法及び水分管理方法を検討したので紹介する。

【普及したい技術のポイント】

- ①低温期の小ネギ直まき栽培において、土壤消毒用の透明フィルムであるバリアスターを播種かん水後にべたがけすることで発芽促進ができる。
- ②かん水量は、播種後に15mmで初期生育がよい。

【べたがけ資材の種類の見直し】

土壤消毒用の透明フィルムであるバリアスターをべたがけすると、パオパオに比べ、地温を高く維持できる(図1)。

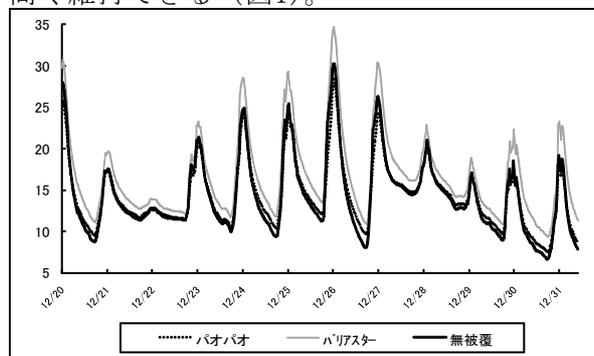


図1 無被覆及び被覆資材別の地温の推移

注1) 2007年12月調査。

【べたがけする際の水分管理】

バリアスターをべたがけ被覆する際の水分管理は、播種前かん水をせずに播種後かん水15mmが良い。

播種3日前にかん水した場合は、播種当日までの作土表面硬化のため覆土不十分になり出芽しても枯死する状況が見られた(図2)。一方、播種前にかん水しない場合でも出芽は良好なため、低温期の発芽に関して播種前かん水の重要度は低い。

初期生育は、バリアスターべたがけ被覆が良く、播種前かん水なしでは播種後かん水15mmの方が良い(図3)。

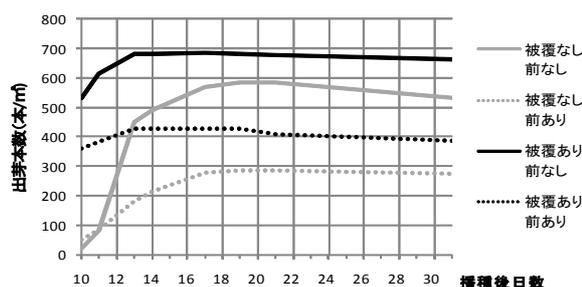


図2 べたがけの有無と播種前後かん水の違いが出芽に及ぼす影響

注1) 2008年12月5日播種。出芽後枯死はカウントしない。

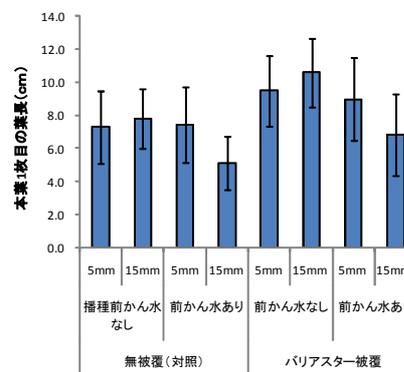


図3 べたがけの有無と播種前後かん水の違いが本葉1枚目葉長に及ぼす影響

注1) 2008年12月5日播種、33、35日後調査。

【透明フィルムによる発芽促進方法】

播種後にバリアスターのべたがけをすることで発芽が促進される。作業手順は、播種→かん水→べたがけ→出芽を確認後べたがけの除去、である。留意点は播種後かん水の水が圃場表面から引いたことを確認し被覆すること、出芽が少しでも見えたらその日のうちに除去することである。特に、除去が遅れると出芽が蒸れる等の悪影響につながるので注意する。